

令和6年度
社会人入学試験

国語総合

広島県立三次看護専門学校
第一看護学科

受験番号() 氏名()

答案作成上の注意

- 1 受験番号，氏名は，解答用紙の所定の欄に必ず記入すること。
- 2 解答は解答用紙の所定の場所に記入すること。
- 3 配布した問題用紙，解答用紙は持ち出してはならない。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

死は場所をえらばない。

ひとが死ぬのは、病院のなか、ベッドの上とはかぎらない。野垂れ死にやツイラク死もある、と言いたいのではない。永久の別れとして死を受けとめるひともしれば、職場で今も務めをこなしながらじぶんはもう死んでいると思うひともある。身体の機能停止としての死が〈死〉の原型だという、医療空間でのお仕着せのイメージを、とにかくうんと遠ざけたくて、まずはそう言ったまでだ。

病院での死は、当人や関係者の A のおよばないところで「処置」される。そこでは、ひとの身体は b の「病体」として取り扱われる。では、病棟でひととしての人称的な関係が生じないかといえ、もちろんそうではない。死の不安に怯える患者、患者を気遣う家族、患者を看るナース、患者を診るドクター、そして事務スタッフと家族のやりとり……と、〈死〉のプロセスの途上で、死を怖れる、死と「闘う」というかたちで、あるいは患者を慰める、はげます、家族を労る、ねぎらう、事務職員と相談する、談笑するというかたちで、人称的なかかわりはいろいろ生まれる。 B、相性がよくなかったりそりが合わなかったりして、関係がぎくしゃくし、 c d だっってくることもある。しかしこれらはあくまで〈死〉のシユウエンで起こることであり、だれかの〈死〉そのものは、医療機関（外科医、麻酔科医、放射線専門医らの医師団）にゆだねられ、人称的にニュートラルなその空間で処理される。人称的なものの〈死〉は、最後まで、死の前に、死のまわりで、死を案じるというかたちでふれられるだけである。〈死〉の処置が済めば、「病体」は「遺体」として家族のもとに返される。そしてこんどは、亡くなったひとを e f という、死の後のさまざまないとなみが生まれる。

② ここてわたしはなにげなく「死の後のさまざまないとなみが生まれる」と書いたが、もつと端的に、死とともに「死者」が誕生すると言ったほうがいいのかもしれない。かつて内田隆三がこう論じていた。「死者とは象徴的な基盤をもった存在であったはずである。それは生者でもなく、また、モノとしての屍体でもない。それは生者／屍体という単純な二分法では分類できない両義的な存在である。死者とはそれらの象徴的な中間項であり、しかも人称性をもった存在なのである」（『消費社会と権力』、と。別の箇所ではこうも書いている。人類は死体に対してこれまで「一種独特なハイリヨ」を示してきたのであって、「身体を単なるモノとしての屍体に等置し、遺棄するのではなくて、その死んだ身体に対して〈死者〉という人称的なカテゴリーを適用し、埋葬という儀礼的な行為の対象と」してきた。つまりここでは、現在わたしたちがあたりまえのように受け容れている生体／死体の二分法ではなく、生者／死者／屍体という三分法が採用されていたというのである。

死者へのかかわりは、弔いとか墓参りとか読経とかかたがたでその後もつづく。死後、しばらく間をおいてから「死者」が生まれるばあいもある。「死者」に身体をもとめるばあいもある。遠隔の地で戦死もしくは事故死した家族の遺骨を、あるいは遺品を h i 旅に出るひとはけっして少なくない。これも「死

者」との関係がまだ生まれていない、したがってまた済んでもいないことの焦燥からくるものであろう。

関係が済んでいないというこの焦燥は、おそらく、おのれの死への不安よりもはるかに痛いものである。おのれの死への不安といっても、そのいくばくかは、あるいは大半は、遺された者への思い、つまりわたしとわたしが気遣うひととのあいだの關係の決定的な変容に向けられているはずだ。死に近づきつつある側も、じつは「死なれる」側への思いで胸が張り裂けそうになっている。「死んだら死につきり……」。たしかにそうである。が、そうしたつづやきは「死なれる」側への思いを断ったとき、たった独りきりのときにのみ口にできる言葉でしかないだろう。

そこで、〔死〕の経験というものをあらためて考えてみるに、死ぬことよりも、死なれることがじつはその原型なのではないかとおもう。だれにも死はかならず訪れる。だれも死を避けることはできない。それは有限の生を生きる者にとって必然の出来事である。けれどもその出来事は経験というかたちで起こることはありえない。経験は死とともに不可能になるからだ。いいかえると、死はいつも経験の彼方かなたにある。死は現在 (presence) になりえない。死はいつも不在 (absence) としてセマiつてくるものである。

これに対して、他人の死はまぎれもない経験として生じる。だれかに死なれるという経験として。無関係なひとの死はひとつのジョウホウjとして経験されるにすぎないであろうが、深い関係にあるひとの死は、「失う」という経験、(他者の、ひいては自己の) 喪失の経験としてまぎれもないひとつの出来事となる。たとい生前にわたしがいかに取るに足りない存在であったにしても、わたしの死はたぶん、わたし以外のだれかにとって、たとえごくごく小さくとも、やはりなにかの意義はもったはずだ。「ばかなやつだった」「なさけないやつだった」というような、否定的な意味あいにおいてであったにしても。だからもし、わたしの死がいかなる他者にとってもひとつの事件になりえないのだとしたら、わたしは生きているときからすでに死んでいると言ってもいいくらいだ。

深いつながりのあっただれかが死ぬということは、わたしをその思いの宛先としてくれていた他者を失うということである。これがなぜ痛いのか。その理由はそんなに不明ではない。〈わたし〉という存在は、だれかある他者の意識の宛先としてかたちづくられてきたものだからである。ひとはだれかに呼びかけられることによってはじめて、他者の意識の対象としてはじめて自己の存在を〈わたし〉として感じる事ができる。生涯だれにも呼びかけられることがなかったひとなど、想像しようがない。「だれもわたしに話しかけてくれない」と嘆きつつみずからいのちを絶つひとはあっても。

この喪失を「慰問」すること、それがおそらくは僧侶そうりよがこれまでなしてきたことなのだろう。七日ごとに、お逮夜たいやのお参りをし、その席で死者についてそれを「亡きひと」として語ることで、喪失の経験を少しずつ和らげてゆく。それと反比例して、「死なれた」者のうちに死者が「死者」、つまりは問安(安否の問いかけ)の相手として生まれてゆく。

生者とのあいだのみならず、死者とのあいだにも「応える」という契機がある。生者のあいだで、問安があるように、死者とのあいだにも問安はある。

これらの問いかけにおいては、問う者と問われる者のあいだに、相手の安否という、問われていることがらがあるのではなくて、「どうしたの？ だいじょうぶ？」と問われる者と、そこで問われていることがらとは一体になっている。そういうかたちで、ひとが、他者になにかを語りかけられ、また問われる者として自己を回復してゆくよう、僧侶はいまも「慰問」しつづけているにちがいない。

(わした 驚田清一著『死なないでいる理由』より)

問一 傍線部 a～j のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 文脈上、空欄 A に最もふさわしい語を、次の①～⑤の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- ① イニシアテイヴ ② イノベーテイヴ ③ インクルーシヴ ④ インストラクテイヴ ⑤ インタラクテイヴ

問三 空欄 B に最もふさわしい語を、次の①～⑤の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- ① あるいは ② しかも ③ だから ④ なぜなら ⑤ 要するに

問四 傍線部①「ひととしての人称的な関係」とはどのようなものか、端的に答えなさい。

問五 傍線部②「死とともに「死者」が誕生する」とはどういうことか。百字程度で答えなさい。

問六 傍線部③「死」の経験というものをあらためて考えてみるに、死ぬことよりも、死なれることがじつはその原型なのではないかとおもう」について、

筆者がどのように考えるのはなぜか。九十字程度で答えなさい。

問七 傍線部④「わたしをその思いの宛先としてくれていた他者を失う」ことが「痛い」理由を、筆者はどのように考えているか。百四十字程度で答えな

さい。

問八 傍線部⑤「僧侶そうりよがこれまでなしてきたこと」について、筆者は僧侶が「死なれた」者に対してどのような役割を果たしてきたと考えているか。九十
字程度で答えなさい。

問九 病院で死を迎えるひとの家族、友人に対して、あなたは看護師としてどのように接し、振る舞うことが大切だと考えるか。本文の内容を踏まえ、あ
なた自身の看護や介助、介護、入院等の経験や知識に基づいた具体例を示しながら二百字程度で述べなさい。